

聖書における都市の意味

—ジャック・エリュールの論述を中心として—

竹 中 正 夫

ジャック・エリュールは、決して狭義の聖書学者ではない。彼は、また神学の専門家でもないし、教職者でもない。彼は、ボルドー大学法学部の法制史の教授をしている社会学者である。彼は、平信徒である。しかし、神学書を深くよみ、聖書を繰り返して学び、社会の状況のなかで聖書の指針をくみとろうとしている。それだけに、彼の聖書解釈には、古い伝統的な定見にこだわらない新鮮なものがある。しかし、決して彼の主観的な考えによる偏った解釈をなさず、聖書全体にあらわれているメッセージを明らかに浮き彫りにしている。

専門家は細部の詮索をするが、大綱の文脈を見失うことがある。俗にいう木をみて森をみないというおそれがある。聖書学者のなかでもこの点について自己批判をしているものもある。たとえば、B・S・チャイルドは、その著「聖書神学の危機¹⁾」において聖書神学によく用いられている言語的、史料的分析をすればするほど、聖書のメッセージを現代人の課題に生き生きと表明するというより、むしろ逆に、こまかい文法上の検討や、歴史的様式の分析や、それにとまなう諸学説の比較検討をなすことによって、ますます、森の木の細部検討に陥って行きがちであることを警告している。

J・エリュールは、前述のように、聖書神学者でないから、聖書解釈についてその方法論を正面からとりあげない。しかし、すでに四巻にわたって、彼の独自の聖書研究を展開している。一つは、ここで主に取り上げようとする「都市の意味²⁾」それに、「ノアの審判³⁾」そして、列王記の物語を扱った「神の政治と人間の政治⁴⁾」である。先述のエリュールの英訳の書物を出版しているのは、ミシガン州のグランドラピッド市にある Eerdmands という出版社であ

る。これは必ずしも、Westminster とか Scribner's あるいは Abingdon などのような長老派やメソヂスト派を背景としたものでなく、むしろ、保守的な改革派の流れをくむ教会を背景とした出版社であることは注目してよい。すでに筆者が先年本研究誌上において紹介したように⁵⁾、エリユールは、いち早く1954年に「技術社会論⁶⁾」をあらわし、技術社会に対する楽観論を排し、その性格を批判的に吟味することによって、鋭い警告を与えている。之は、理性による人間の解放を強調したいいわゆる世俗化の神学者たるより、はるかに預言者的であり、保守的福音主義者によってエリユールが注目されて来た 所以である。

しかし、エリユールは、いわゆるファンダメンタリストと根本的に異っている点がある。それは、彼が、社会学者として、社会的政治的な問題を深く分析し、それに対する聖書のメッセージを解明している点にある。エリユールは社会分析において、かなりカール・マルクスの批判的研究から学びとったものを用いている。彼は、狭義のマルクス主義者ではないが、マルクスによってなされた社会における人間の疎外状況の社会学的分析を十分に援用している。彼は、マルクスに答えを見出さないが、現実分析には、マルクスを用いているといっても過言ではあるまい⁷⁾。

わが国においても、最近 J・エリユールの書物の邦訳があいつづいておこり、エリユールについての関心が広がっていることは興味深い現象である。すなわち、すぐ書房が七巻にわたる「ジャック・エリユール著作集⁸⁾」を計画し、すでに三巻が出版されたのをはじめ、白水社の「現代キリスト教思想叢書」には、彼のキリスト教倫理学が訳出され、さらに主著「法の神学的基礎」の出版も計画されているという。わが国のように、キリスト教の人口の少い国で、エリユールの作品がどれ位広く読まれるか一つの興味ある課題である。それは、キリスト教と現代社会の対話の一つの興味ある課題である。それは、キリスト教と現代社会の対話の1つの具体的なケースであるからである。

本稿では、主として「都市の意味」をとりあげてみたい。彼は、本書の序文でものべているように、この書物において、意図的に、聖書の中にあられて

いる都市の意味を、聖書全体のパノラマの中で、一貫した姿で浮き彫りにしようとしている。そこでは、断片的なテキストの分析に終るのではなく、それをつなぎ合わせることによって、全体として描き出される聖書の都市像を一連の文脈の中から把握しようとしている⁹⁾。

都 市 の 建 設

カ イ ン

聖書において、最初に都市を建設したのは、カインであった。彼は、アベルを殺したのち、エデンの東、ノドの地に住んで、カインは結婚し、妻はエノクを産む。カインは町を建て、その町の名をその子の名にしたがってエノクと名づけた。（創世記4ノ8—17）

エリユールはこの物語から都市の基本的な性格をくみとる。都市は、樂園を追放されて、放浪者となったものによって形成された。カインが定住した町の名、ノドという名は、「さすらいの地」(the land of wandering) という意味をもっている。それはエデンの東にあった。エリユールは、聖書において東という方角は、良いものをあらわしているときと、悪いものをあらわす場合と二つあることをのべている。前者の例としては、アブラハムが東から来たことや、イザヤが「わが名を呼ぶ者を東からおこさせる」（イザヤ41・25）といったことや、博士たちが東から来たことなどをあげている。後者の例としては、人を殺しをしたものは、エデンの東に留り、また世の権力者となった最初の人ニムロデも東から来たことを指摘する。（創世記10ノ8—9）

都市にあるものは、原罪を宿した人間の「流浪性」であり、「不安」であり、東にあるということは、その腐敗と汚濁にあって救いを待つ姿を示しているとエリユールは解釈する。そして、この都市についての基本的な性格が、聖書の中に繰り返してあらわれて来ていることを確認する。

カインが建設した町の名を彼は自分の子の名にしたがってつける。それはエノクという。エノクとは「自分で始める」(Chanakh, to initiate), エデンの園が神から造られたのに対し、都市は人間によって建設された。「創造」は神に依存しているが、「建設」は人間の業に基いている。人間の築いた都市の文

明の根底には、人間の業に対する誇りが存在していることをエリユールは鋭くついている。

旧教聖書では、都市をあらわす言葉として 'iyre 又は 'iyre re'em という言葉が用いられている。エリユールはこの言葉は、いくつかの意味に用いられていることに注目する¹⁰⁾。すなわち、「都市」という言葉が「見張りをする天使」とか「復讐」あるいは「恐怖」という意味をあらわす言葉として用いられている。都市は単なる家のあつまりでなく、それは、精神的な意味をもっている。それは、精神的な存在ではないが、精神的な力を宿している。都市は、物質的、機械的存在のようにみえるが、精神的影響力をもっている。

カインは、復讐の力を都市に宿した。人間は、物質的・技術的力を都市に投じ、都市を誇りと不安の場とした。しかし、それらは、エリユールにとってさして重要なことではない。重要なことは、都市が精神的な力をもつとするなら、神にとってどういう意味をもつかということである。

ニムロデ

カインのつぎに都市を建設した者は、ニムロデであった。聖書は彼のことを「力ある狩猟者」(a mighty hunter, 創世記 10ノ9)と記している。彼は、ハムの子孫であった。ハムは、神の基本的な律法を破った不純の子であり、「しもべのしもべとなって、その兄弟に仕える」(創世記 9ノ25)という呪いのことばを受けている。ここでも、カインの物語と同様に神から呪われた者が権力を強くし、都市の建設をしたことが示されている。都市は、神に反逆して流浪者となったものによって築かれている。

しかし、反逆者はそのままに放置されていなかった。ちょうど、神にそむいて殺人を犯したカインに対して、神は保護を約束された(創世記 4ノ15)ように、ニムロデは、神なき存在ではなく、神の下にあった。聖書が、「彼は主の前に力ある狩猟者であった」(創世記 10ノ9)と記していることに注目してエリユールはのべている。

「ニムロデが主の前にあったということは、彼が人間にふさわしい姿をとっていたことを示している。審判者であり、主権者である主の前に人間が立っているということは、普遍的な理解である。それは、父が子供たちを招くの

とは異っている。それは、人々がその前に 燔祭をもってくる 怒りの神である。大地はその前に黙し、もろもろの力も塵のように砕かれる。主の前という前置詞は、神からの離反と神の臨在との両方をあらわしている。彼が主の前にあるということは、彼がなすことのすべては、主によってみられ、また知られており、しかし彼は、主から離反していたことをあらわしている¹¹⁾」

創世記の記者は、ニムロデがはじめシナルの地で、バベル、エレクト、アカデ、カルネなどの地方を征服し、都市を築き、さらに、アッスリヤに出て、ニネベ、レホボテリ、カラ、そして大いなる町レセンなどを建てたことを記している。もちろんこれはすべてニムロデによって建てられたものとは言えない。また、これらの都市の建設の歴史的叙述をしているのでもない。エリユールはつぎの二つの点に読者の注意を喚起する。一つは、ここでは都市を築いた人々の名は記されておらず、むしろ都市の名が記されていること、第二の点は、それらの都市の文明の基本的性格が示されていることである。その性格とは、権力と支配の精神であった。その精神に基づいて都市の文明は築かれ、その精神は「シドンからゲラルを経てガザに至り、ソドム、ゴモラ、アデマ、ゼボイムを経てレシャに及び」（創世記10・19）シドン、ソドムとゴモラは頽廢の町としてイエスによっても引用されている¹²⁾（マタイ11ノ20—25）、さらに、現代の都市技術文明にまで一貫して継承されているとみなす。しかし、ニムロデは、孤立したものではなく、主の前にあった。

バベル

ニムロデ王国の中心はバビロンのバベルであった。バベルは聖書学者たちによって「神々の門」ともいわれ、あるいは「混乱の場」ともいわれ、塔づくりの物語りで有名である。しかし、聖書は、塔の建設だけを抽出してのべていない。「さあ、町と塔を建てて、その頂きを天に届かせよう。」（創世記11ノ4）主は「言葉が通じないようにしよう」といわれた。「主が彼らをそこから全地のおもてに散らされたので、彼らの町を建てるのをやめた」（11ノ7・8）。ここで明らかなことは、塔が中心的なことではなく、町の建設が中心的な課題であり、塔はその一部をなすものである。

エリユールは、ここで彼らが町に名前をつけたことに注目する。イスラエルの人々にとって、名前をつけるということはきわめて深い意味をもっていた¹²⁾。それは、精神的な意味をあらわしており、さらにその存在の独立性の象徴であった。名前をつけられたものは名前をつけたものの対象 (object) となっている。彼らが町の名にバベルという名をつけたことは、神から離反した人間が独立し、都市を建設したことをあらわしている。ここから、エリユールは、都市のもつ三つの性格についてのべる。一つは、都市は人間による精神的征服と支配が確認されている場所であり、神を除外して人間の勝利を誇った行進の場である (man's triumphant march without God¹³⁾)。第二の点は、その行進の不可欠の帰結として都市が建設されているということである。都市文明は、神を除外して、自己を支配者として建設した人間の文明であり、人間の独立と成功と誇りを精神的基盤にもっている。そこは、丁度、カインが、エデンの東に宿って町を築いたように、神から離反した人間が東に移り建設した町であり、神を除外して自らを主とした町であった。

第三の点は、この町を建設する人間の努力が、天にまで昇ろうとする上昇行為であるのに対して、反逆の町に対する神の愛は「下にくだる」(11ノ5) 働きである。人間の「上に建てる働き」(building up) と神の「下に宿る働き」(coming down) が対比されている。それは、聖書において一貫した形態とし継承されている。そして、やがて、イエス・キリストの受肉において成就している。

ニ ネ ベ

ニネベは、同じニルムデの建てた町の一つであったが、他の都市とは異った性格をもっている。それは、反逆の町であったが悔改めの町となったからである。ニネベは、たしかに血なまぐさい町であった。「血を流す町。その中には偽りと、ぶんどりが満ち、略奪はやまない」(ナホム3ノ1) とうたわれた町である。この町は戦争の町、車輛がとどろき、むちの音がなりひびき、騎兵は突撃し、つるぎがきらめき、死体がうず高く積れているというすさまじい町である。エリユールが一貫して指摘した町の性格、すなわち、征服と誇り、支配と自己主張などの性格を最もむき出しにあらわしたものがニネベであった。聖

書は、さらにニネベが淫行の町であり、淫行をもって諸国民を頽廃させていた町であったことを指摘している。このことは、罪が個人的次元に止らず、社会的次元から考えられていることを物語っている。とくに軍事力と経済力が結合し、技術と政治の集約化によって、個人ではどうすることも出来ない巨大な力となって、町全体を血なまぐさい頽廃の町として了っていることを物語っている。ニネベは、港町であり、東西文明が出会う町であった。もちろん、それは、今日の都市のように多様な全世界の文明の交流を意味してはいなかった。それは、せいぜい地中海沿岸にみられる範囲であった。しかし、ニネベが、東西文明の交錯、衝突の町であったことは、現代的意義を充分にもっている。

東西の文明の葛藤の中に、軍事力と経済力が結合し、技術と政治が結びついた血なまぐさくも頽廃した町は、神の審判を受けるにふさわしい町であった。神の呪いの対象となっても誰一人疑う者のない町、それがニネベであった。『「ニネベは滅びた」と。だれがこのために嘆こう』（ナホム書3ノ7）

エリユールは、ニネベの様相を現代の都市の性格にあてはめて、つぎのようにべている。

『「死体は数限りなく、人々はその死体につまずく」くというニネベの記録は、わたしたちに、無差別爆撃によって、灰塵となった都市を連想させる。都市に住んでいたという外には、なんの責任のない子供たちまですべて死んでいる。そこから、抜け出すことの出来ない相互依存関係がある。都市は、力をもつが故に破壊し、確信をもつが故に、すべてを剥ぎ取ってしまう。血なまぐさい都市で、飛行機は生産され、自動車は氾濫し、工場から出る煤煙によって労働者は健康を害し、虚しい快楽がひしめいている。おそろしい審きが歴史を通して都市に臨んでいる。「ニネベを荒して、荒野のような、かわいた地とされる」（ゼパニヤ書2ノ13）何人も都市にある共通の性格を何ら変えることは出来ない¹⁴⁾』

しかし、ニネベは、この否定的な性格にもかかわらず、他の都市とは異った役割を聖書のなかで果たすに至った。それは、ニネベが悔い改めの町となったということである。神は預言者ヨナをニネベに遣し、神の命じる言葉を語った。

「そこでニネベの人々は神を信じ、断食をなし、大きい者から小さい者まで荒布を着た」(ヨナ書3ノ5)

社会的な悪の唯中における一人一人の市民の悔い改めの重要性がここで確認されよう。神は、そこで「わたしは12万あまりの、右左をわきまえない人々と、あまたの家畜とのいるこの大きな町ニネベを、惜しまないでいられようか」(ヨナ書4ノ11)といわれる。

ここに、審判と呪いの対象であった町が神のゆるしとあわれみの対象となっている。神は町の文化や技術の保全のために町をあわれんだのではなく、町の住民たちと生きものたちの故にその町を破滅から守られた。「右左をわきまえない人々」とは、平凡な名もなき民のことをあらわしている。新約聖書でいう、群衆(ochlos)である。イエスが深くあわれまれるのも飼う者なき群衆であった。(マタイ9ノ36)

イエスはエネベについて語るとき、ソドムの町との対比においてみる事が出来る。両者とも反逆と頽廢の町であった。ソドムは悔い改めなかった町々の一つとしてあげられている。(マタイ11ノ20—24)それに対してニネベは「ヨナの宣教によって悔い改めた」町としてその名を残している。(マタイ12ノ41)ここで指摘されることはつぎの2点である。① 神は反逆と頽廢の町を呪われるが、町の人々、とりわけ弱い人々、右も左もわからない庶民たちをかえりみ給う。② 神のあわれみにめざめて悔い改めることが、希望なき町の人々の望みである。

バビロンの町にて

かくてイスラエルにとって、しばしば町に住むことが、避けられない運命のようなものであった。今日、現代人は都市の生活を避けることが出来ないし、それは、現代文明の姿を象徴しているものである。

とりわけ、捕囚時代のイスラエル民族にとってはそうであった。なぜなら、彼らは、強制的にバビロンの町に連れてこられたからである。すでにみたように、バビロンは、町のシンボルの中でも最も顕著なものであった。

エレミヤはバビロンに連れて行かれたイスラエルの人々につぎのようにのべ

ている。

「あなたがたは家を建てて、それに住み、畑を作ってその産物を食べよ。妻をめとって、むすこ娘を産み、また、そのむすこに嫁をめとり、娘をとつがせて、むすこ娘を産むようにせよ。その所であなたがたの数を増し、減ってはならない。わたしがあなたがたを捕え移させたところの町の平安を求め、そのために主に祈るがよい。その町が平安であれば、あなたがたも平安を得るからである。」（エレミヤ書29ノ4―7）

ここでは、イスラエルの民は捕囚の身にある。捕われているもの、牢獄のなかにあるものにとっては、そこから逃げ出すことが最大の目標である。あるいは、バビロンの町にさからって、それをうち破ることをねがう。エリユールはこうした状況にあって、神の民の責任は、神に代ってその審きを執行するのではなく、むしろ、住民の一人として、神の審きと同時に赦しをうけることにあるとする¹⁵⁾。そこで、大切なことは、再び、カインやニムロデのように、尊大な都市づくりをするのではなく、ロトの妻のように都市から逃避するのではなく、都市の中に住み、日常性の中でその住民と共に、その町の平安を求めることである。エリユールはこう説明する。

「このことをもう少しははっきりさせておく必要がある。なぜならば、わたしたちは、物質的にその町の生活に参与し、そのしあわせのために尽すようにすすめられているのである。町の破壊ではなく、その平安を求めるようにいわれている。しかも、わたしたちの平安ではなく、わたしたちの町の平安である。然り、わたしたちの町の繁栄に参与し、その中で働き、人口を殖やすようにすすめられている。町の繁栄を連帯性をもって守ることが捕囚の民の課題であるというのである。しかも、その町の支配者は、彼らを捕囚の人としているのである¹⁶⁾」

これは、捕われの身にある者の諦念から生れて来た生き方でもないし、権力者へのへつらいから出て来た生活の知恵でもない。これは、捕囚の民の終末論的信仰から生れてくる倫理である。

「主はこう言われる。バビロンで七十年が満ちるならば、わたしはあなたを顧み、わたしの約束を果し、あなたがたをこの所に導き帰る。」（エレミヤ29ノ

10) という神の約束に対する希望から生れる生き方といってもよいと思う。

エレミヤの手紙は、わたしたちがまだ待望のときにあることを示している。捕囚の中にあるものは、暗闇の中にある。夜の呻吟のときは、同時に永遠の朝を待望するときである。韓国で戒厳令がひかれて間もなく、わたしの親しい韓国の教友からクリスマスのたよりを貰った。彼は、バビロンの捕囚のことを聖書をひもといて学びつつこう書いている。

「クリスマスカードありがとうございます。ところが、私達、今とてもよろこびをもってクリスマスを迎える気持になれないのです。詩篇 137 篇の歌が思い出されます。シオンの歌をうたう気になれない。捕われの身になったような思いです。まさか、まさかと思っているうちにバビロンがわたしたちの真中に実現されたのです。

こんな痛みを感じるのは間違った教育をうけた少数の人だけでしょうか。西欧の教育が悪いんだと、その筋の権威者たちが熱心に教えています。それでも、わたしたちは、この暗さ、痛み、不条理をおのが身を傷めるものがきなくして受け入れることが出来ないのです。うめきともがきが今日のわたしたちの Life Style になりそうです。

聖書の中に何か慰めの言葉を探し求めて、真剣に読んでおります。エレミヤが捕囚の民に書き送った手紙の一節、『あなたがたは家を建てて、それに住み、畑を作ってその産物を食べよ。妻をめとって、むすこ娘を産み、……』のところがわれわれにあたえられたことばのようにきこえることもあります。それにしても、あのダニエルと三人の友達の物語が本当だったらいいなあと思います。

クリスマスは、やはり楽しくない方が実感に近いんじゃないでしょうか。たくさんのあかごが殺されたり、母たちの涙があったんですから、Christmas story はやはり作り話しじゃなかったんですね。こんなに real に感じたことははじめてです。マリヤにも、ヨセフにも、ゼカリヤにも、天使のことばだけが頼みで、現実に全く希望のない状態でしたから。」

これは、現代のアジアの都市と都市で交わされた書簡である。しかし、エレミヤの記した捕囚者へのすすめのことばが現代的意義をもっていることを如実

に示している。

む す び

われわれは、ジャック・エリュールの「都市の意味」を中心に、聖書における都市の意味を考究してきた。エリュールは、自らも認めているように、厳密な意味の聖書学者ではない。しかし、彼は、聖書を一貫してよくよみ、また、現代の聖書学者の文献にもかなりよくあたっている。しかし、何といても、彼の専門は聖書学ではなく、社会科学の領域の専門家である。にも拘らず彼の試みの中には傾聴すべきいくつかの点がある。その数点をあげてみよう。

- (1) 彼は聖書全体における都市の意味を問おうとしている。断片的に一箇所の釈義ではなく、一貫して繰り返して出てくる基本的な都市の意味をとらえようとする。オーケストラにするなら、こまかい小節の細分的検討ではなく、全体に流れる底流となっているメロディーの把握を試みようとする。
- (2) 最初に都市を建設したカインにはじまる聖書における都市建設の歴史は、神に反逆した、力ある者の業であり、都市には、人間の自己の力に対する誇りと他に対する支配の精神が宿されている。それは、神の怒りと呪いの対象物でもあった。
- (3) しかし、神は、頽廃した都市を呪ったが、都市の住民、とりわけ弱い人々、疲れている人々、飼うもののない羊のような存在を深くあわれまれた。神は、それらの人々をかえりみ、彼らを守り平安を与えるように意図される。「主が町を守られるのでなければ、守る者のさめているのはむなし」(詩 127ノ1)
- (4) 都市の住民の責任は、都市から逃避することではなく、都市の頽廃の連带的責任の一部を負って、神の言をきいて悔い改めること、そして、自分の住んでいる近隣の日常生活の中で、共同のしあわせを求めて住民と一緒に力をあわせて暮らすことにある。それは、別の都市文化づくりではなく、来るべき神の都を待ち望む者の現在の都市における準備の生活である。
- (5) 聖書のことばを他の諸科学の領域に関連させるといふ困難なしかしきわ

めて重要な学際的営みの一つの例をエリュールはここに示している。ここに、彼の主著である「技術社会」で刻明に分析された都市の性格から出てくる人間の生き方への問いが、「都市の意味」において聖書に根ざして答えられており、両者の対話と交流がなされていることは示唆にとむものがある。

エリュールの技術社会における都市論をここからもう一度ふり返ってみると興味あることであるが、与えられている紙数もあるので擱筆することにした。

注

- 1) Brevard S. Childs, *Biblical Theology in Crisis*, 1970
- 2) *The Meaning of the City*, 1970.
- 3) *Le Livre de Jonas*, 1951 (*The Judgment of Jonah*, 1971)
- 4) *Politique de Dieu, politique de hommes*, 1966 (*Politics of God and Politics of Man*, 1972)
- 5) 竹中正夫「技術社会と人間」—ジャック・エリュールの技術論, 基督教研究, 第37巻, 第2号。
- 6) *La Technique ou l'Enjeu du siècle*, 1954.
- 7) たとえば, 技術社会の分析において「マルクスが, 1830年頃から現在にいたる時代に関して, その経済発展全体の起動力を技術の発達とみたとき, かれは疑いなく正しい」とのべ, しかし, このことは「マルクスが, かれの主張からひきだした諸結論が正しいといっているのでもない」と釘をさし, 「ここで必要なのは, 歴史の進展とともに, ますます経済は, その細部においてまで, いっそう非弾力的に技術の発達に依存するという, マルクスの観察が間違っていないことを確認することだけである」と結んでいる。「技術社会」上, 島尾永康・竹岡敬温共訳, すぐ書房, 1975, p. 226.
- 8) ジャック・エリュール著作集, すぐ書房, 「現代公式文句評釈」田辺保訳, 1974「暴力考—キリスト教からの省察」唄野隆訳, 1974, 「技術社会(上)」島尾永康・竹岡敬温訳, 1975, 「技術社会(下)」倉橋重夫訳, 「ブルジョワの変貌」井上裕子訳, 「革命の屍体解剖」原幸男訳, 「政治の幻滅」大野道邦・高坂健次訳, 「都市の意味」田辺保訳。
- 9) *The Meaning of the City*, xvii-xviii.
- 10) 同上書, p. 9.
- 11) 同上書, p. 12.
- 12) 高橋虔「旧約における固有名詞について」基督教研究, 第37巻, 第1号。
- 13) Ellul, 同上書, p. 16.
- 14) 同上書, p. 22.
- 15) 同上書, p. 73.
- 16) 同上書, p. 74.